

この結果、Wetmore が何故に “carotenoid” と称したかに就いては、その化学的根拠が全く証明されていない為に、甚だ理解に苦しむ。彼の “carotenoid” の唯一の手がかりであるところの An. 塩の顕微鏡写真と、筆者の分離した nephroarctin の An. 塩とを比較すると、黄色の長く伸びた両端は次第に細まり、中央部のやゝ膨らんだ特異な形は非常によく似て居り、その記載並びに呈色反応もよく一致する。しかしながら、nephroarctin は決して “carotenoid” ではなく、むしろ depside に非常に近いものと考えられ、その構造式からは、恰も depside の A 部の COOH が脱炭酸されて脱落してしまったかの如き印象を与へる新しいタイプの物質である。

○薬用牡丹の栽培法 (佐々木一郎) Ichiro SASAKI: On the cultivation of medicinal Peony, *Paeonia suffruticosa*

奈良県吉野郡には古くから山畑利用の、薬用植物及び果樹の栽培地が沢山ある。薬用のため栽培されて居る牡丹は根を目的とするため根の発育が良く、その皮層が厚く、芳香の強いもので、花としては花卉の数の少ない花の小さな園芸価値の乏しいものである。生薬牡丹皮即ち牡丹の根皮はこの地方が産地で五条、下市等の生薬集荷人によって集荷される。この辺の産出高は日本中で最も多く、品質も生薬界で良いものとされて居る。

薬用の牡丹は 8 月下旬より 9 月初旬 (植付後 5~6 年目) 畑より掘り取り、根だけは生薬集荷人の所へ出荷され、その根を取った牡丹は 1 本 1 本に分けて苗木とする。(この苗は根が全然付いていない。) すりこぎ同様のこの苗木は、2~3 本を一まとめにしわらで束ねて一株として、9 月初旬~中旬迄に山畑に植え付ける。この時期が牡丹移植の適期で、春は最も移植に不適當の時期である。植え付け株数は 10 アール当り 600~700 株で、植え付けは浅く植え、根元をよく鎮圧し、この挿木同様の苗木には竹で支柱を与えている。これは深く植えると収穫の時、小さい細い根が多くなるため、収量が少なく太い良い根皮が取れないためである。そしてこの植えた苗の根元には晩秋より春迄土を 6~7 cm 位積み上げて置き、春になって寒害の無くなった時出来るだけ早く積み上げた土を除去する。植え付けて 2 年目迄は中耕するが、その後は中耕をしていない。

牡丹を植える際良く気を付けねばならない事は、排水の良いやゝ重い粘質土壌で、傾斜地の東南面で西日のあたる時間の少ない所が良い。連作をとて最も忌む牡丹は一度植えた土地は 10 年位は植えられないし、前作が芍薬であった所は、牡丹は育たないで枯死する株が多いので良くない。苗木は乾燥しない中になるべく早く植える方が良いが、日時を要する時は植える迄日陰で時々水をかける程度で決して永く水に漬けてはいけな

(津村研究所)